

一宮市 博物館 だより

No.63 2020.3

もくじ

福塚前遺跡第二次発掘調査	1
博物館アルバム(平成31・令和元年度)	2～6
資料紹介(1)日本画家・戸島光基 としま こうき の「一宮絵日誌」と「訪宮戯画」 ほうぐう	6・7
資料紹介(2)『北方村史』・『北方村史資料草稿』	8・9
令和2年度 展覧会・催し物のご案内	10～12



福塚前遺跡 航空写真(手前が第二次発掘調査地)

福塚前遺跡 第二次発掘調査

令和元年11月4日から12月25日までの約1ヵ月半、福塚前遺跡(今伊勢町馬寄)で第二次発掘調査を行いました。調査の目的は、①昨年度行われた同遺跡の発掘調査で見つかった2本の周溝のそれぞれの直径を明らかにする、②同周溝が同じ時期に掘削された二重周溝か否かを確認する、という2点です。今回は360㎡と狭い調査範囲でしたが、狙い通り周溝の続きが確認でき、それぞれの直径が明らかになりました。二重周溝に関しては、現在遺物の整理を行っている段階のため明確ではありませんが、可能性は低いと考えています。(学芸員 瀧はる香)



第二次発掘調査地近影

妙興寺所蔵「仏涅槃図」(重要文化財)の特別公開

令和元年5月24日(金)～5月26日(日)

鎌倉時代の涅槃図としては国内最大級のもので、長年、京都国立博物館に寄託されていましたが、近年当館に移され、所蔵先の意向で特別展示室にて展示しました。作品の状態で悪く3日間のみでしたが、30年ぶりの一般公開ということで841人の方が来館されました。愛知教育大学教授の鷹巣純氏による展示説明も行いました。



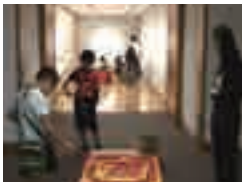
博物館で夏祭り!

令和元年7月20日(土)～9月1日(日)

昨年に引き続き、夏休み期間中に子ども向けの様々な催し物を開催しました。今年は「博物館資料調査隊 with 学芸員」と題して、考古・歴史・美術・民俗とそれぞれ担当の学芸員といっしょに展示物を詳しく観察し、調査カードを作るワークショップを全8回開催しました。市内の三岸節子記念美術館と尾西歴史民俗資料館とあわせて3館で調査カードを完成するとオリジナルグッズをプレゼントする企画も行いました。8月10日から12日には、「発見! 体験! 夏祭り!」と題し、「つば釣り」「古墳キーホルダー」「葉っぱスタンプでカードづくり」の3つのイベントを開催しました。また期間中に、展示資料の一部



資料調査隊・歴史



つば釣り

をズームしたクイズに挑戦する「熱狂! ズームクイズラリー!」を開催し、職員でも悩んでしまうような超難問に沢山の子が挑戦してくれました。館内の喫茶コーナーでは、夏祭り限定のメニューも登場しました。

企画展「2019 一宮美術作家協会展」

令和元年7月20日(土)～8月4日(日)

一宮美術作家協会会員69名による作品を展示しました。日本画、洋画、彫刻、立体、デザイン、工芸と各作家の個性あふれる多彩な作風を楽しむことができました。長年出品してこられた岩田哲夫氏が亡くなり、その画業を偲ぶ作品も展示しました。

企画展「一宮写真協会選抜写真展」

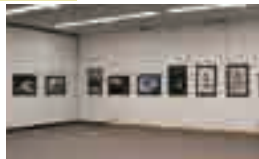
令和元年8月8日(木)～8月18日(日)

一宮写真協会会員による選抜写真展。30人の出品者それぞれの熱い思いを込めた作品が展示されました。

企画展「真清田神社」

令和元年9月3日(火)～9月29日(日)

平成30年8月24日に真清田神社所有の「金銅釣灯籠」(昭和43年3月2日・一宮市指定文化財)が新たに愛知県指定文化財となりました。この新指定を記念して真清田神社に大切に伝え残された宝物など約50点を展示し、紹介しました。

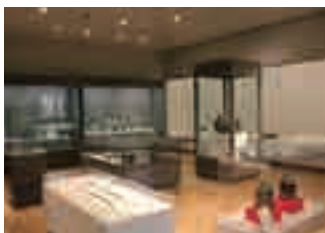


「第二章 神社の御祭礼」では、国指定重要文化財及び愛知県指定文化財「舞楽面」や愛知県指定文化財「獅子頭」や、かつて桃花祭で使われていた「神輿」などを展示し真清田神社の祭礼の一端を紹介しました。

「第三章 信仰のかたち」では、人びとが願いを込めて奉納・寄進した品々のうち、昭和20年の一宮空襲の焼失を免れ伝え残されてきた国指定重要文化財の神饌具、金銅釣灯籠(愛知県指定文化財)や刀剣、鏡、蘭奢待、尾張藩主徳川義直寄進と伝わる吐水龍などを展示しました。

学芸員による展示解説では、真清田神社の歴史・宝物の伝来などについて紹介しながら、真清田神社の歴史を感じとっていただきました。また「真清田神社界隈を歩く」では、真清田神社の権欄宜塚越啓陽氏に神社境内を隅々まで案内していただき実感していただきました。

(学芸員 石黒智教)



展示風景



9月15日子どもアートツアー

「尾張平野を語る24」

今年度は、企画展の関連催事として、「真清田神社」をテーマに次の内容で開催しました。

■9月7日(土) 塚越啓陽氏(真清田神社権欄宜)

講演会「古代尾張平野における真清田神社の神祇と祭祀」

■9月14日(土) 真清伶人会

公演会「里神楽の公演」

■9月21日(土) 鬼頭秀明氏(一宮市文化財保護審議会委員)

講演会「真清田神社の祭りと芸能」



9月7日 講演会

特別展「生誕120年記念佐藤一英展」

令和元年10月13日(日)～11月24日(日)

2019年は、長編詩「大和し美し」などで知られる一宮市萩原町出身の詩人・佐藤一英(1899～1979)の生誕120年の年にあたり、その全貌を紹介する特別展や催し物を開催しました。10月11日に関係者による開会式を行い、一英のお孫さんの真下あさみさんに詩の朗読をしていただきました。翌12日から一般公開の予定でしたが、台風の影響で12日は休館となり、13日からの公開となりました。奇しくも一英さんのお誕生日でした。

博物館では、これまでも佐藤一英に関する展覧会を交流のあった宮沢賢治や棟方志功との関連で開催してきましたが、今回はその活動の全貌を紹介することを目指し、ご遺族のご協力のもと準備を進めました。自筆の原稿などのほか、一英宛ての書簡を多数ご遺族からご提供いただきました。詳しく調べてみると、大学で同期であった横光利一や吉田一穂、詩人の萩原朔太郎、福士幸次郎、川路柳虹、春山行夫、画家の寺田政明、棟方志功のものなどが含まれ、一英が当時どのような交流の中で活動していたのかが浮かび上がってくるような貴重な資料であり、展覧会で公開することになりました。出品作品は一英の詩集、自筆原稿、詩画のほか、棟方志功の版画や円空の仏像などの美術品、交流のあった文学者・芸術家からの書簡など150点以上に及びました。円空仏は江南市の音楽寺に伝わるもので、一英が生前、円空研究者で一宮市在住の長谷川公茂氏とともに訪れて見た仏像のうち貴重な2点を、地元の村久野区の方々のご協力で展示する事ができました。また地元の校歌を多く作詞していることから、萩原小学校の自筆の校歌の書もお借りして展示しました。

展覧会図録は、佐藤一英研究の基礎資料となることを願い、出品資料の写真のほか、国際日本文化研究センター教授で日本近代文学が専門の坪井秀人氏による論文をはじめ、一英の主な詩や詳細な年譜、ご遺族のエッセイなども掲載しました。

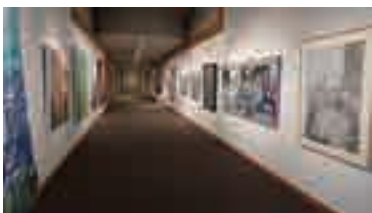
期間中には様々な催し物を開催しました。10月26日に妙興寺本堂をお借りして開催した萩原中学校の生徒さん18名による詩と童話の朗読については、夏休みに2回練習を行い、本番に望みました。一英が子ども向けに優しい言葉で表した作品を、心を込めた朗読で楽しんでいただきました。11月4日には妙興寺仏殿の幻想的な雰囲気の中で、ソプラノ歌手とライアー(竖琴)奏者による音楽とともに一英の詩の朗読が行われ、大変好評でした。11月9日は、一英が檜の木文化論を唱える中で近隣の人々から収集した檜の木の道具を収めた萩原町の檜の木文化資料館と、一英が設立に関わり詩の石碑も残る萬葉公園を、郷土史研究家の田内雅弘氏の熱心な案内で見学しました。11月10日の坪井秀人氏による講演会では、本展で初公開の萩原朔太郎の書簡などを紹介しながら、一英が当時の詩壇のどのような人々と交流しどのような位置づけにあったかを講演いただきました。翌週17日のシンポジウムでは、パネラーに俳句、短歌、詩、文学研究者と異なる分野の方々をお招きし、有意義な催しとなりました。その他お子さん向けにも展覧会の見学ツアーやワークショップを開催しました。ツアーの際には、ワークシートに記入しながら展覧会を見た後、一英の生涯を双六にしたものも体験しました。特別展と催し物を通じ、節目の年に地元ゆかりの詩人を偲ぶことができました。

(学芸員 杉山章子)

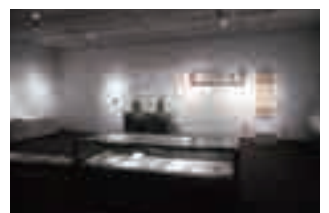
企画展

「2019 一宮市現代作家美術秀選展」
令和元年11月30日(土)～12月15日(日)

第77回一宮市美術展の成果等をうけて、一宮市美術展市長賞受賞作品11点のほか、日本画、洋画、彫刻・立体、工芸、デザイン、書、写真など、各協会に所属する作家66名の作品を展示しました。



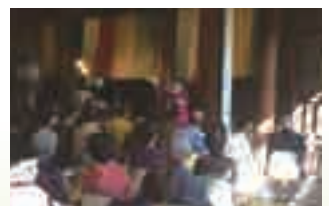
檜の木文化資料館・萬葉公園の見学会



展示風景



シンポジウム



歌・竖琴・朗読が織りなす佐藤一英の世界

企画展「くらしの道具」博物館にすむ妖怪たち

令和2年1月11日(土)～3月8日(日)

毎年1月から3月にかけて開催している企画展「くらしの道具」も平成3年から始まり、今年で29回目となりました。

会期中には、一宮市内42校すべての小学3年生が見学に訪れる予定でしたが、コロナウイルス感染予防のため、3校の来館が中止となりました。電気やガスがなかった時代に使われていた道具の見学をはじめ、長着・わら草履や石臼ひき体験を行いました。裸足で履くわら草履の感触、初めて触る石臼などにどの子も興味津々で、見学中は子供たちの楽しそうな声が絶えず聞こえていました。

今回は「博物館にすむ妖怪たち」をテーマに、道具を「付喪神」という妖怪に見立て、紹介しました。妖怪という子供にも親しみやすいテーマということもあり、週末などは朝から多くの親子連れのお客様をはじめ、幅広い年齢層の方々にご来館いただきました。

また、期間中に開催した関連イベントにも、大勢の方にご参加いただくことができました。例年好評の「こども風づくり教室」では日本の伝統的な和風を作ったり、「たのしい昔あそびで遊んでみよう」では、けん玉やコマ回し、おはじき、あやとりなどの遊びを子供から大人まで世代を越えて楽しく遊んでいただけました。「親子で昔のおもちゃをつくろう」キラキラ万華鏡「や」道具妖怪をつくろう」といった工作イベントも行いました。「道具妖怪をつくろう」では、午前・午後どちらも大変な人気で定員を上回るほどの参加希望がありました。参加していただいた親子の皆さんには材料を切ったり、貼ったりしながら自分だけの万華鏡や提灯おぼけなどを作ってもらいました。完成すると、参加した全

員「かわいい」「楽しかった」と話しながら、作った作品を嬉しそうに見せてくれました。

小学生を対象にした展示されている道具と同じ道具を触る「みて！さわって！昔の道具を学ぼう」では、火のしや炭火アイロンなどの実物の道具を触ってもらうことで、仕組みや道具にある工夫など展示だけではわからない道具のことについて、より深く学んでもらえる機会となりました。さらに期間中行っていた「みんなで描こう！妖怪絵巻」では、自分の考えた道具妖怪が描けるスペースを展示室内に設置し、すてきな絵がたくさん集まりました。

(学芸員 吉川ひとみ)



昔の道具を学ぼう



展示風景



道具妖怪をつくろう



風づくり

特集展示コーナー

2階の展示室の一角を「特集展示コーナー」とし、博物館に所蔵あるいは寄託されている美術工芸品を様々なテーマで紹介しました。

これまで玉堂記念木曾川図書館内の記念室で展示

していた川合玉堂の作品が、空調機械の故障のため博物館での保管となったことから、4月から6月にかけて、春と夏の季節感を感じられる作品を前期と後期に分けて紹介しました。鈴木八郎は瀬戸の陶工で、妙興寺の老師や一宮の実業家と親しくしたことなどから、当館に作品が多数所蔵されています。日展などに出品された様々な技法による大皿や花器などの陶芸の大作のほか、スケッチや貼り絵も展示しました。「妙興寺の名宝」では、寄託されている重要文化財の貴重な文書を前期と後期に分けて紹介しました。12月には、一宮市萩原町生まれの洋画家・寛忠治の作品を紹介。若いころから長年にわたって描かれた迫力ある自画像を中心に、繊細な表現の花や猫の作品も展示しました。2月には、500点を超える毛織物の墨コレクションから、江戸時代に大名たちが仕立てた火事装束を紹介しました。鈴木八郎、寛忠治については過去に特別展で紹介して以来、久しぶりの展示となりました。

「川合玉堂の名品」前期：4月9日～5月12日

後期：5月14日～6月30日

「鈴木八郎 陶芸の世界」7月2日～10月6日

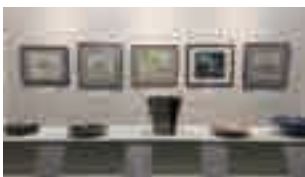
「妙興寺の名宝 妙興寺文書」

前期：10月12日～11月4日

後期：11月6日～12月1日

「尾張の洋画 寛忠治」12月3日～2月2日

「墨コレクション 火事装束」2月4日～4月5日



鈴木八郎 陶芸の世界



尾張の洋画 寛忠治

たいけんの森

毎週土曜・日曜・祝日に、夏休み期間中は毎日開催しました。

4月から6月は「民族衣装を着てみよう」ということで、ラオスやメキシコの民族衣装を着てもらいました。子供の日はさむ5月1日から6日まで、近年恒例となっている「戦国のよろいを着てみよう」を行いました。夏休み期間中は「とびだすカードで展覧会」と題し、小さな展示室をつくるような感じで所蔵品の図版を貼り付けた立体的なカードを作りました。9月は真清田神社展に関連し古地図のコピーを用いてバッグを作る「古地図で紙バッグ」、10・11月は佐藤一英展に関連し「小さな詩集」を、12月から1月は季節に合わせて「紙でつくる門松」を、2月から3月は土器のイラスト等を用いた「かわり絵カード」を行いました。保護者の方と来館した小さなお子さんが多く、楽しく参加していました。



とびだすカードで展覧会



小さな詩集

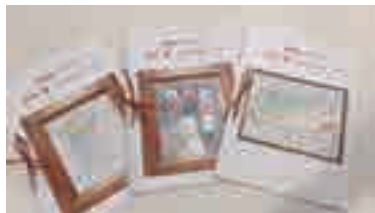
博物館キッズクラブ

小学校3年生から中学生を対象とし、今年度は13名の応募があり、色々な展示をワークシートを用いて主体的に見学しました。6月は特集展示で川合玉堂の作品を見学、8月は愛知県陶磁美術館で展示を見学するほか陶芸体験もしました。9月は企画展「真清田神社」

を、11月は特別展「佐藤一英」を、1月・2月は特集展示を見学しました。いつも特集展示の見学の後は、ワークシートをつづる表紙にお気に入りの作品をスケッチするのですが、皆さん作品をととてもよく見て丁寧に書いていました。きつと大人になっても覚えていてくれるでしょう。



愛知県陶磁美術館での見学



佐分眞たんけんノート

博物館実習

8月8日から12日までの5日間、愛知淑徳大学と富山大学の学生2名が実習を行いました。最初は館内を見学しながら文化財害虫への対策や館の活動を学び、当館で開催するワークショップを何か考え、最終日にプレゼンテーションしてもらうという課題を出しました。また、古文書の整理、軸などの扱い方のほか、「博物館で夏祭り！」に合わせた土器の展示や、催し物の手伝いも行ってもらいました。最終日には、課題として出したワークショップについて、それぞれの専門分野にひきつけた提案をしてくれました。美術品、古文書、土器と幅広い資料に触れながら、館の管理や展示、教育普及など博物館の学芸員が行っている多岐に渡る仕事を体験してもらいました。



古文書の整理

民俗芸能公演

一宮市内には、地域のくらしの中で育まれてきた貴重な民俗芸能などが、数多く伝えられています。博物館では民俗芸能の伝承推進事業の一環として民俗芸能公演を開催しています。今年度は初めての試みとして島文楽の公演を博物館隣・妙興寺の市指定文化財・客殿において開催しました。

・5月18日(土)

宮後住吉踊保存会「宮後住吉踊」(市指定無形文化財)
・5月19日(日)

ばしょう踊保存会「ばしょう踊」(県指定無形文化財)
・5月26日(日)

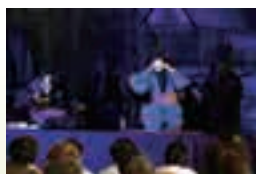
島文楽保存会「島文楽」(市指定無形文化財)



宮後住吉踊



ばしょう踊



島文楽

古文書講座「古文書にしたいむ」

5月・2月

平成4年度に古文書講座を開講してから今年度で28回目を迎えました。これまで定員42名で行ってききましたが、平成30年度から受講者を20名としました。今年度は「宮地花池村木村家文書」の中から、庄屋を悩ます村に起こった事件を読み進め、その時代背景などを学んでいました。第9回・第10回の講座では難易度の高い手紙をグループ内で読み合わせをするなどし、受講生同士で教え合いながら楽しく学んでいました。



市民文化財めぐり(中止)

9月12日、岐阜街道の一部、真清田神社のお旅所から真清田神社まで歩きながら周辺の文化財をめぐる予定でしたが、当日の最高気温が35度以上の予報であったため、熱中症の危険性が高いと判断し中止しました。

文化財防火デー関連行事

昭和24年1月26日、奈良・法隆寺金堂壁画が焼損しました。以来、この日を「文化財防火デー」と定め、この日を中心に毎年、文化財を火災、震災、その他の災害から守るため、全国的に文化財防火運動が行われています。一宮市では1月16日に市消防本部とともに文化財パトロールを実施し、1月24日には木曽川町の賀茂神社において防火訓練を実施しました。

文化財防火パトロール
(浅井町・長誓寺)文化財防火訓練
(木曽川町・賀茂神社)

展覧会への所蔵作品の貸し出し

■一宮市立中央図書館「森春濤生誕200年講座」
(10月22日～11月17日)に森春濤「聞鵲」など6点。
■セゾン現代美術館「闘争そしてあるいは叙情 堤清二／辻井喬 オマージュ展」に「楯の会制服(冬服)」。

資料紹介(1) 日本画家・戸島光基の「一宮絵日誌」と「訪宮戯画」

当館には、京都の日本画家・戸島光基の日本画の小品、法隆寺壁画の模写、絵付けを担当した花瓶や水指のほか、一宮滞在中の事を描いた絵巻3点が所蔵されています。漢詩人・森春濤の研究者であった後藤利光氏旧蔵の作品です。これまであまり紹介されていない画家ですが、今回4月7日からの特集展示にて絵巻の絵日誌を中心に所蔵作品を展示します。

戸島光基(本名・光雄は、明治42年4月27日に京都に生まれ、昭和38年11月27日に54歳で亡くなりました。父は戸島光孚(光阿弥、本名・弥一郎、1882～1956)といい、時絵師として知られ、内国勸業博覧会や帝展に出品し、京都市美術展では審判員を務める程でした(図1)。鯉の作品を得意とし、『鯉魚集』(昭和17年、芸艸堂という作品集を発表しています。その序文によると、光孚は竹内栖鳳に師事して絵を学び、その後家業を継いで時絵師となりました。絵の腕前は、館蔵の小品からも窺えます(図2)。光基は、京都市立美術学校、同美術専門学校、同研究所を卒業した後、堂本印象の画塾・東丘社に入塾します。その後、昭和8年第14回帝展を皮切りに、亡くなる翌年昭和32年の第13回日展まで入選を重ねました(表参照)。父と同じく京都市美術展にも出品していました。当館所蔵の小品や出品歴、残された図版を見ると、花鳥のみならず人物画や風景画など幅広く描いていたことが窺えます(図3～6)。これまで光基は東福寺に住む画僧とされてきましたが、ご遺族によると僧侶ではなく、東福寺の塔頭・竜吟庵を制作場所とした画家でした。戦時中、僧が出征して部屋が空いていたことから住むようになり、東福寺には他にも画家が何人かいて、広い部屋を利用して展覧会出品のための大作などを制作していたということです。

図3. 戸島光基「菜園夏日」
(『日展史11 帝展編6』より)図4. 昭和22年
第5回京都市美術展覧会出品
戸島光基「村」葉書、館蔵図1. 戸島光阿弥「波紋舟手篋」
(『日展史資料1』より)図2. 戸島光孚「祥鯉」
(館蔵)

戸島光基主な出品歴 (昭和期美術展覧会出品目録)より
第14回帝展(昭和8年)「菜園夏日」(図3)
第1回京都市美術展(昭和10年)「松」
文展(昭和11年秋)鑑査展「瀑」
第1回新文展(昭和12年)「土佐ノ磯」
第2回京都市美術展(昭和12年)「流れ」
第2回新文展(昭和13年)「爽朝」
第4回京都市美術展(昭和14年)「春宵」
大毎奉祝日本画大展開覧会「南薫(琉球)」
第4回新文展(昭和16年)「水軍」
第5回新文展(昭和17年)「基地」
第6回新文展(昭和18年)「國民合唱歌」
奉祝京都市美術展覧会(昭和19年)「晴好」
第5回京都市美術展(昭和22年)「村」(図4)
第5回日展(昭和24年)「小雨」
第7回日展(昭和26年)「奈良の板倉」
第8回日展(昭和27年)「A氏の店」
第9回日展(昭和28年)「十条風景」
第10回日展(昭和29年)「生魚会社」
第12回日展(昭和31年)「ある部落」
第13回日展(昭和32年)「路地」



図5. サツマイモの花(館蔵)

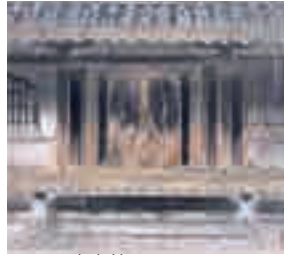


図6. 戸島光基
「泉涌寺舍利殿之図」(館蔵)

所蔵品の中でも興味深いのが、戸島を支援していた一宮の後藤幸三郎氏(利光氏父)宅に、家族と一緒に戦中戦後の3回滞在した時のことを絵と文で記した絵巻物の「訪宮戯画」全2巻と「一宮絵日誌」全1巻です。

まず「訪宮戯画」巻之一は、昭和19年8月2日から4日までの絵日記です。戸島は娘の久美子とともに一宮を訪れ、御馳走をいただきながら3日間を過ごして帰京しました。文章のほか、帰りの道中階段で転んで尻もちをついたり、電車の中で居眠りをするユーモラスな姿が軽やかな筆の動きで描き出されています(図7)。京都に帰ると、お土産の入ったリュックを背負って痛めた肩に、奥さんがアンマ膏を貼っている様子まで描かれています。父島や硫黄島に米軍が出撃したこともメモされています。終戦のちょうど一年前のことです。

巻之二は、昭和19年10月16日から27日までの記録で、満員電車に乗って京都から名古屋を経て一宮に向かいました。息子の光宇が初めてうどんを食べたことが、イラストとともに記されています。10月17日には雨の中、傘をさして犬山に松茸狩りに出かけ日本ラインの風光明媚な景色を楽しみました。横にはイラスト入りで、料亭の食事や柿、松茸、いもの値段が記されています。10月18日は一宮女子商業学校に教諭として初登校しましたが、職員室の教員の「間のビタ顔と感覚」に早くも幻滅しています(4日後には帰京しており、いつ頃まで勤務したかは不明)。翌19日は、後藤氏や恩人の伴氏の家

を訪れた時の様子が家の中のイラストとともに記されています。そして20日には、電車に乗って家族とにぎやかに弁当を食べつつ帰京しています(図8)。絵日記の最後には、フィリピン沖レイテ湾での日本軍の戦果が記録として記されており、外地の戦況が激しさを増していることが伝わります。

「一宮絵日誌」は、戦後の昭和21年4月2日から5日まで、やはり一家四人で一宮を訪れた時のものです。終戦間もない時期で戦争の跡の残る街並みを見ながら破損の目立つ列車で一宮にたどり着きました。戦争で多くの家が焼けたにも拘わらず、すでに新築の家が建ち、神社の前には戦前のように商店が並んでいる様子を見て、一宮の復興の早さに驚いています。翌4月3日は真清田神社の大祭で、その様子が挿絵とともに生き生きと記されています(図9)。とくにそれぞれの町の馬の飾りについて、詳しく書かれています。夜は岩田徳太郎氏の家で御馳走になり、戦災にあった人の人情味と、逆に被災していない人の利己的な部分について思いを巡らせ、被災していない京都の人間として心すべきとしています。後藤氏の旧宅は被災したため新居に滞在しました。周囲の焼け焦げた立ち木を絵にしています。また屏風を修理に出した様で、焼けずに残ったことに喜び、見に行っています。栄氏、滝善家など知り合いの家も訪れ、夜は一宮の人々と戦後、久しぶりに楽しく酒を飲みかわしたことを喜んでいます(図10)。最後の部分には一宮の知り合いの家の戦後の新築状況をメモしています。

いずれの絵巻も、一宮での楽しい滞在の様子や人々の暮らしの様子が、戦前戦後の時代背景をのぞかせながら、巧みな絵と文章とで生き生きと描き出されています。4月7日からの特集展示で、前期と後期に分けて絵巻と日本画の小品を展示しますので、是非ご覧ください。

(学芸員 杉山章子)



図9



図10



図7



図8

「訪宮戯画」(部分)

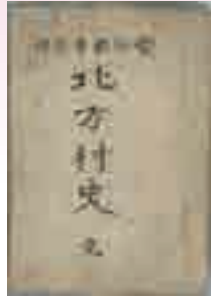
「一宮絵日誌」(部分)

資料紹介(2)

『北方村史』・『北方村史資料草稿』

一、はじめに

小稿では、当館所蔵の大正4年(1915)の『北方村史』と服部先生述『北方村史資料草稿』を紹介する。いずれも服部松太郎の手によるものである。「北方村史」に関しては、小稿で紹介するこの2冊のほかに、服部松太郎『北方村史稿』(一宮市立中央図書館蔵)がある。この2冊『北方村史』と『北方村史資料草稿』は『北方村史稿』の底本あるいは異本とも考えられる。



『北方村史』



『北方村史資料草稿』

まず著者の服部松太郎について簡単に触れておく。服部松太郎は、尾張藩士岡田金右衛門の子・忠道の子として明治元年(1868)北方村(現一宮市北方町曾根)に生まれた。父忠道が美濃国円城寺村(現岐阜県羽島郡笠松町円城寺)の服部太助家を継いだため、松太郎も服部姓を名乗ることになる。明治14年(1881)、13才の時に東京に出て外国語を学び、帰郷。明治16年(1883)に黒田小学校訓導(教諭)になってから昭和4年(1929)北方尋常高等小学校校長(一宮市立北方小学校)を退職するまで、初等教育に精励した。

服部は、その間に北方村の歴史を調べ『北方村史稿』を作成する。作成年代については奥書等がないため不明であるが大正8年頃と推定され、その構成は「第一章 現情」「第二章 沿革」「第三章 記念すべき事項」「第五章 口碑及び史実」「第七章 敬神思想

と神社」「第八章 宗教と寺院」とある。しかし第四章と第六章が欠章しており、また各章の各節も欠節している部分があるため、未完と考えられる。しかしながら、北方村の歴史を扱った郷土史は本書のみであり、その意義は大きい。その後、平成8年(1996)に出版された郷土史家・田中三郎氏が著した『木曽川風物紀要・河畔の里 きたがた』は『北方村史稿』を補完するものであり、田中氏の現地における緻密な調査には脱帽する。以下では、服部が著した『北方村史』と『北方村史資料草稿』を紹介したい。

二、『北方村史』

『北方村史』の編さんについては「はしがき」に次のようにある。

今や海外に確飛するの志気を奮起せしむるせざる可らず、されど我住む郷の何たるをも知らず、徒にをき境越のみ知らむとするはひか事なり、されは今茲大正四乙卯大典のこよなき悦びを記念せむとて、此の冊子を八論することゝなれり、凡そ記録の要は事の後に伝なるをその主眼とするを以て、此冊子亦然あるべしと雖も、兼て童稚の我が教育に資する所あらむとして、卑俗を行文の卑俗を免れざるふしぶし多かるとも獻はざりき、看る人幸に之を諒せよ 編者誌

大正四年木典記念

とあるように、北方村の歴史を知らない人が多いため、また児童教育に資することも考えて『北方村史』を編さん、作成したようである。しかし、実際に発行するまでは至らなかった。

構成は「第一章 現情」「第二章 滄桑の変」「第三章 沿革」「第四章 記念すべき件」「第五章 口碑及史実」「第六章 風俗の一斑」「第七章 敬神思想と神社」「第八章 宗教と寺院」「第九章 各種の団体及その活動」であ

るが、いずれの章も完全形ではない。

例えば「第六章 風俗ノ一斑」(写真を見ると、加筆や修正等が多く見られる。またこの第六章については『北方村史稿』には含まれておらず、大正4年以前の北方村の風俗を知る唯一の手がかりとなる。ちなみに同章には「冠婚葬祭」「大日の行列」「狐塚の神楽」「吊祭」「雨乞」「川祭」「お日待」を収録し、タイトルのみとして「天王祭」「爆竹」「棚織」「船下し」「幟祝」「雛祭り」「其他の祝賀」を載せている。また『北方村史稿』には含まれていない部分として「第九章 各種の団体及その活動」がある。この章では当時の北方村内における「村農会」「尚武会」「兵人軍人会北方分会」「青年会」「処女会」「農事研究会」「学齡児童救護会」「通俗教育会」「消防組」の活動を記載している。また「故大審院勅任検事高木久国君伝」や「明治11年10月北陸東海御巡幸」などを綴じている。

本資料は、不完全な部分は見られるものの、大正4年以前の北方村を知る上で必要不可欠な資料である。

三、『北方史資料草稿』

次に『北方史資料草稿』をみてみよう。『北方史資料草稿』には「はしがき」にあたる部分がないため、その編さん目的を知ることができない。また構成は「第二章 沿革」「第三章 記念すべき事項」「第五章 史実及び口碑」「附録雑記」「産業史」「史跡名勝絵はがき」を収録しているが、「第一章」と「第四章」が欠章している。「第一章」と「第四章」以外の章は丁寧に整理され、一部に鉛筆による加筆が認められるが、ほぼ完全原稿としての体裁を整えている。また「附録雑記」「産業史」



『北方村史』第六章風俗ノ一斑の部分

については鉛筆で書かれているが、産業史の項では昭和5年度(1930)の統計資料(写真)を用いており、『北方史資料草稿』は昭和6年頃に書かれたものと考えられる。この『北方史資料草稿』を整えた上で、発行する予定でいたかも知れない。

また『北方史資料草稿』には服部から北方村の山口村長に宛てた10月4日付けの手紙が綴じられている。山口村長は昭和12年12月から昭和21年12月までその職にあった。服部は昭和17年に亡



『北方村史資料草稿』「産業史」の部分

くなっていくが、北方代官の酒井七左衛門が文政2年(1829)に亡くなっているため、この手紙は昭和15年(1940)であろう。それには、

私、村史の原稿として暫らく集めたものを持って居ましたが、昨年十二月頃北方陣屋御代官酒井八左衛門殿百三十年祭に当りまして聊か村より参列をよはれ出張なし難き旨(病氣ノ為)を以て聊か村に答へたのを百二十年祭にへ…

とある。この頃、服部は病気を患っており、酒井七左衛門の法要に参列していない。

またこの時期、服部は、水害を防ぐために作られた畑繋堤防(岐阜市柳津町)の建設に尽力した酒井七左衛門と、治水の犠牲者である奥村元右衛門・渡辺藤左衛門・伊藤丹藏・野田勘右衛門を祭神として祀った畑繋神社(岐阜市柳津町丸野2丁目)の昇格のために奮闘していたが、行き詰まり、「…村長様方になる筈です、尚一座御揮し下さいませ。私は野々垣様より確かに出来るだけ書出すことを請合しましたが、今何もあ

りません。私の調べた結果の全く、唯今急に何とも致し難い訳に御座います。」と、北方村山口村長にその指揮を依頼している。

さて、『北方史資料草稿』はその内容からほぼ完全原稿として整えられており発行を目指していたが、服部自身、病気で活動が絶えていたのかもしれない。現存する北方村史を整理すると、大正4年の『北方村史』↓『北方村史稿』(大正8年頃か)↓『北方村史資料草稿』(昭和6年頃か)の順であったと考えられる。

四、『北方村史』から『北方町史』へ

さて、昭和30年(1955)、旧一宮市と合併した丹陽町、浅井町、北方村(合併後の表記は「北方町」とする。)、大和町、今伊勢町、奥町、萩原町、千秋村(合併後の表記は「千秋町」とする。)では、合併以前あるいは合併後に、町村史編さんが検討されていた。

丹陽町では、大正9年(1920)に機関誌「丹陽」を発行し、来る『丹陽村誌』の編さんに備えていたが刊行されず、平成12年(2000)に丹陽町史誌編集委員会が『丹陽町史誌』を編さんし一宮市社会福祉協議会丹陽支会が発行した。浅井町では合併前の昭和24年に『浅井町史編纂』を議決し昭和42年に『一宮市浅井町史』を発行、今伊勢町では昭和32年に『今伊勢町史編纂委員会』がつくられ昭和46年に『一宮市今伊勢町史』を発行した。奥町では昭和11年に『奥町誌』を発行したが合併後に新たな町史編さんは見られなかった。萩原町では昭和30年に『萩原町史編纂委員会』がつくられ、昭和44年に『一宮市萩原町史』を発行した。また千秋町では合併後の昭和31年に『千秋村史』を発行した。

このように昭和30年の合併によって、北方町と大和町を除いた町村では町村史誌編さんがなされ、発行されている。しかし、北方町において町史編さんの動

きがなかった訳ではなく、『北方町史編さん委員会関係文書』(写真)によると昭和32年12月7日に着手していたことがわかる。

昭和38年4月17日には、当時東京大学で助教を務め一宮市史編纂委員であった尾



『北方町史編さん委員会関係文書』

藤正英(1923～2013)が一宮市史編さん室の職員と一宮市役所北方支所を訪ね、北方町史編さんのために蒐集した資料の一時借り出しを受けている。その時、貸し出しされた資料は「天保村絵図」4枚(北方村2枚・曾根村1枚・中島村1枚)、「北方村史」2冊、「書拔」3冊、「宗門送り状」1束であった。ちょうどこの頃は『新編一宮市史』資料編の編さんに伴い市内で資料蒐集がなされていた時期でもあった。『北方町史』の基本編さん資料は言うまでもなく服部松太郎が編さんした『北方村史』と『北方村史資料草稿』であった。しかし昭和40年3月19日、北方町史編纂委員長から一宮市役所企画課長に「町史編さんについて」という文書が出され、「諸事情によって昭和40年度から町史編さんを打ち切る」との申し出がなされた。『北方町史』の発行は幻となった。

(学芸員 石黒智教)

【参考文献】田中三郎『木曾川風物紀要』河畔の里 きたがた 1996年

展覧会・催し物

所蔵品による企画展「川合玉堂 墨の詩情」

4月25日(土)～5月17日(日)

夏季イベント「博物館で夏祭り！」

7月18日(土)～8月30日(日)

企画展「2020 一宮美術作家協会展」

9月5日(土)～9月21日(月・祝)

企画展「一宮写真協会展」

9月24日(木)～10月4日(日)

企画展「禅僧の書」

10月17日(土)～11月15日(日)

特別展「発掘された日本列島2020」

11月28日(土)～12月27日(日)

企画展「くらしの道具」

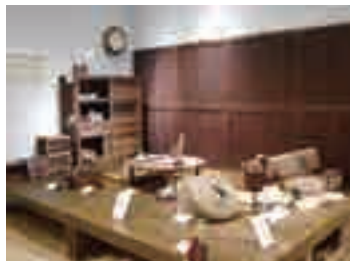
1月16日(土)～3月14日(日)

企画展「一宮市現代作家美術秀選展」

令和3年3月20日(土・祝)～4月4日(日)



川合五堂「五月雨」



企画展「くらしの道具」(2019年度)

企画展「禅僧の書」

博物館に隣接する臨済宗妙心寺派の妙興寺には、禅僧による水墨画や墨蹟が多く残されています。また中世には京都の僧侶との間に盛んに往還があったと考えられ、初期水墨画の名品が伝え残されています。その代表作として鎌倉・南北朝時代に東福寺を中心として活躍した画僧・良全の重要文化財「白衣観音像」(14世紀、図1)があります。本図の上部には東福寺や南禅寺の住持を歴任した乾峰士曇(1285～1361)の賛があり、良全が乾峰と同時期に彼の周辺で活躍していたことがわかります。また中国宋元画を学んだ禅林の画壇に重きをなした明兆筆と伝える重要文化財「文殊図」(15世紀)上部には臨済宗夢窓派の僧・空谷明応(1328～1407)が記した応永7年(1400)12月の賛があります。また市指定文化財「白衣観音像」(15世紀)も明兆筆と伝えられています。他にも龍湫周沢の市指定文化財「不動明王画像」(14世紀)は上部の賛文から嘉慶元年(1387)に描かれたことがわかります。また江戸時代になると、臨済宗の中興の祖とされる白隠慧鶴(1686～1769)の作品も残されています(図2)。

一方、墨蹟に目を転じると元の渡来僧で建長寺を再建した一山一寧(1247～1317)の「七字一行書」や天龍寺の開山・夢窓疎石(1275～1351)の「偈頌」、大徳寺の住持であった沢庵宗彭(1573～1646)の「偈頌」、白隠慧鶴の墨蹟なども伝えられています。なかには、頓智で有名な一休さんこと一休宗純禅師(1394～1481)筆と伝えられる「偈頌」も残されており(図3)、多様な禅僧の禅画や墨蹟を楽しむことができます。また近年、当館に寄贈された禅画や墨蹟のなかから、尾張地域ゆかりの禅僧の作品もあわせて紹介します。絵と賛(文字)とが絶妙に配置された空間構成や個性ある禅僧の筆遣いなどを楽

しんでいただき、その歴史的背景などもわかりやすく紹介します。また名古屋大学大学院文学研究科人文専攻・斎藤夏来研究室にご協力いただき学生による展示も行います。
展覧会期間中(10月17日～11月15日)は、講演会や展示解説なども開催する予定です。

(学芸員 石黒智教)



図1. 良全「白衣観音像」
重要文化財、妙興寺蔵
一宮市博物館寄託



図2. 白隠慧鶴「達磨図」妙興寺蔵

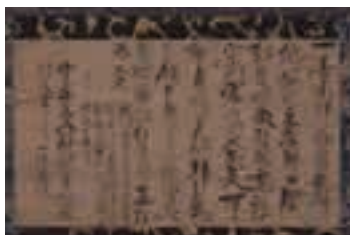


図3. 伝一休宗純「墨蹟(偈頌)」
寛正元年(1460)、妙興寺蔵

特別展「発掘された日本列島2020」

突然ですが、問題です。

発掘調査は全国で年間何件行われているのでしょうか？

- ① 約80件
- ② 約800件
- ③ 約8000件

ヒント：発掘調査は道路や住宅建設など開発工事に伴うものがほとんどです。一宮市でも昨年そして今年と市道の拡幅工事に先立って発掘調査を行いました。また、最近の名古屋城のように活用を目的とした発掘調査も増えています。

さて、答えの発表です。正解は「③約8000件」。もちろん年によって多少の増減はありますが、発掘調査が多い地域・少ない地域はありますが、全国が発掘調査の数を合わせると毎年これだけの件数になります。当然、調査ごとに新しい発見があります。ただ、その成果を知る機会は、現地説明会であったり、地元でしか行われない小さな展覧会であったり、と極めて限られています。

そこで文化庁主催で始まったのが、「発掘された日本列島」展（以降、列島展）です。埋蔵文化財に親しみ、その保護の重要性に関する理解を深めることを目的とし、近年発掘され特に注目された出土品を中心に展示する、全国を巡回する展覧会です。

この列島展が、令和2年11月27日～12月28日、一宮市博物館に、15年ぶりにやってきます！

令和2年度は当館を含め全国5館を回ります。北から南へ巡回展の名のとおり、全国を回ります。

- ① 江戸東京博物館（東京都墨田区）
- ② 新潟県立博物館（新潟県長岡市）

- ③ 福島県立博物館（福島県会津若松市）
- ④ 一宮市博物館（愛知県一宮市）
- ⑤ 中津市歴史博物館（大分県中津市）

展示内容は、最新の発掘成果を紹介する「新発見考古速報」のほか、特集として「日本の自然が育んだ地域文化」、「我が町が誇る史跡・名勝・記念物」の2つのテーマに沿った展示が行われる予定です。「日本の自然が育んだ地域文化」では、当館所蔵の尾張病院山中遺跡の資料と、西上免遺跡の資料が、全国を回ることが決まっています。

巡回館共通の展示部分とは別に、各館の個性が光る地域展も開催します。当館では「発掘された一宮」と題し、昨年度、そして今年度発掘を行った福塚前遺跡の成果を公開できるように現在作業中です。福塚前遺跡のほかにも過去に発掘した遺跡の紹介を行う予定です。また、講演会や考古学に興味のない人でも楽しめるようなイベント等を計画しています。続報を楽しみにお待ちください。

（学芸員 瀧 はる香）



福塚前遺跡出土・紡錘車



福塚前遺跡 上空写真



平成17年開催時の子供向けの展示説明の様子



平成17(2005)年に当館で開催した際には、1ヶ月の開催期間で来館者は5000人を超えたそうです！

特集展示コーナー

戸島光基の一宮絵日誌

前期 4月7日(火)～5月17日(日)

後期 5月19日(火)～6月28日(日)

オリンピック記念コイン(藤原コレクション)

6月30日(火)～10月4日(日)

没後80年 森半逸 山水の美

前期 10月6日(火)～10月25日(日)

後期 10月27日(火)～11月23日(月・祝)

発掘された一宮

11月28日(土)～令和3年1月31日(日)

郷土の漢詩人・森春濤

2月2日(火)～2月28日(日)

墨コレクション・洋装 軍服からスーツへ

3月2日(火)～4月4日(日)



森半逸「秋林晩景之図」



明治天皇所用フロックコート

たいけんの森・わくわく体験

◆開催日時／土曜・日曜・祝日(夏休み期間中は毎日)午前9時30分～正午・午後1時～4時30分

◆対象／中学生以下(大人も1回100円で参加可)

民族衣装を着てみよう タイ・ドイツなど

4/4(土)～5/3(日)・5/9(土)～31(日)

戦国のよろい・陣羽織の試着体験

5/4(月・祝)～5/6(水・休)

紙でつくるメダル6/6(土)～7/31(金)

ふりふり研究ノート8/1(土)～10/4(日)

「禅僧の書」関連企画 小さな書の掛け軸

10/10(土)～11/23(月・休)



紙でつくるメダル



戦国のよろい

「発掘された日本列島」関連企画 土器のしかけ絵カード

11/28(土)～令和3年1/31(日)

「くらしの道具」関連企画 からくりおもちゃ六角がえし

2/6(土)～3/28(日)

博物館キッズクラブ 新規会員の募集

学芸員といっしょに博物館に展示してある様々な資料を見て、楽しみながら学びます。

「彫刻作品をたんけん」、「特集展示の見学」、「夏祭り」など。

▼対象／小学校3年生～中学生

▼定員／20人(抽選)

▼申込／4月30日(木)までに、はがき又はFAXに名前・学校名・学年・住所・電話番号・保護者名・メールアドレス又はFAX番号を記入の上、「博物館キッズクラブ」係まで。「いちのみや子育て支援サイト・アプリ」からもお申し込みいただけます。

古文書にしたいしむ「江戸時代の村と

百姓のすがたを垣間見る」参加者の募集

博物館で保管する江戸時代の一宮地域の古文書を使用して、古文書の解読方法と歴史的背景を学びます。

◆日程／5月9日～令和3年2月13日の原則毎月第2

土曜日午後2時～4時(全10回)

◆対象／市内在住・在勤の16歳以上の方

◆講師／小川一朗氏(市文化財保護審議会委員)

◆定員／4人(抽選)

◆受講料等／3000円(教材費)

一宮市
博物館
だより

第63号

発行日／令和2年3月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／モリ印刷株式会社
※過去の博物館だよりは、
館のwebsiteでご確認いただけます。



一宮市博物館公式SNS 最新のイベント情報や博物館の日常などを更新しています！



〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216 URL <http://www.icm-jp.com/>

●4月より常設展の料金が、7月より貸しギャラリーの利用料金が改定となります。詳しくはwebサイトでご確認ください。

■常設展示観覧料(令和2年4月1日～)

	個人	20人以上の団体	常設展示年間観覧券
一般	300円	240円	600円
高校・大学生	150円	120円	300円

※以下の方は無料です。

◆中学生以下の方(一宮市内も市外も)。

◆一宮市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方。

◆身体障害者手帳・戦傷病者手帳・精神障害者保健福祉手帳・療育手帳を持参の方(付添人1人を含む)。

※常設展示年間観覧券は、発行から1年間有効。一宮市博物館の常設展示(同額の企画展も含む)を期限内に限り、何度もご覧いただけます。

但し、常設展示観覧料と異なる企画展および特別展の期間中は使用できません。別途観覧券をお求めください。

※特別展・企画展の観覧料はその都度定めます。